2024年春は、新幹線で福井へ、そしてあわら温泉へ!

「東京発、芦原温泉行 レールが繋ぐ2時間40分」

1997年の高崎駅ー長野駅間の着工より27年の歳月を経て、2024年春北陸新幹線の東京-敦賀間がいよいよ開業となります。最速の「かがやき」に乗って頂くと、東京から敦賀までが3時間8分、福井までが2時間51分、そして芦原温泉駅までは約2時間40分での到着となります。東京駅からの直通「かがやき」「はくたか」は、1日に計7往復が運行となり、これまで以上に福井が、そしてあわら温泉がぐっと身近に!新幹線の駅改札では、べにやのスタッフが笑顔で皆様のご到着をお出迎え致します。ぜひ、送迎のお車では新幹線に揺られた2時間40分の感想をお聞かせ下さい!皆様のお越しを心よりお待ち申し上げております。

冬到来、越前がに懐石プラン御予約承り中。

北陸、冬の味覚の王者「越前がに」が今年は2日遅れての漁解禁となりました。厳冬の日本海で上がる越前がには、身は甘く引き締まり、蟹みその芳醇で濃厚な味わいが、日本だけでなく世界にも多くのファンを持つ福井県のブランドがにです。べにやでは、今年も料理長が厳選した越前がにを、「茹でがに」や「刺身・焼き蟹」などでお楽しみ頂けるプランをご用意しております。

越前がに懐石

旨味を凝縮した越前がにを堪能頂ける人気のプランです。茹でがに、刺身・焼き蟹などお好みの食べ方をお楽しみ下さい。

越前がに・特大せいこがに堪能懐石

越前がにとせいこがに(雌のズワイガニ)を両方お楽しみいただけるプランです。
※11月7日〜12月31日限定

越前がに・水がに堪能懐石

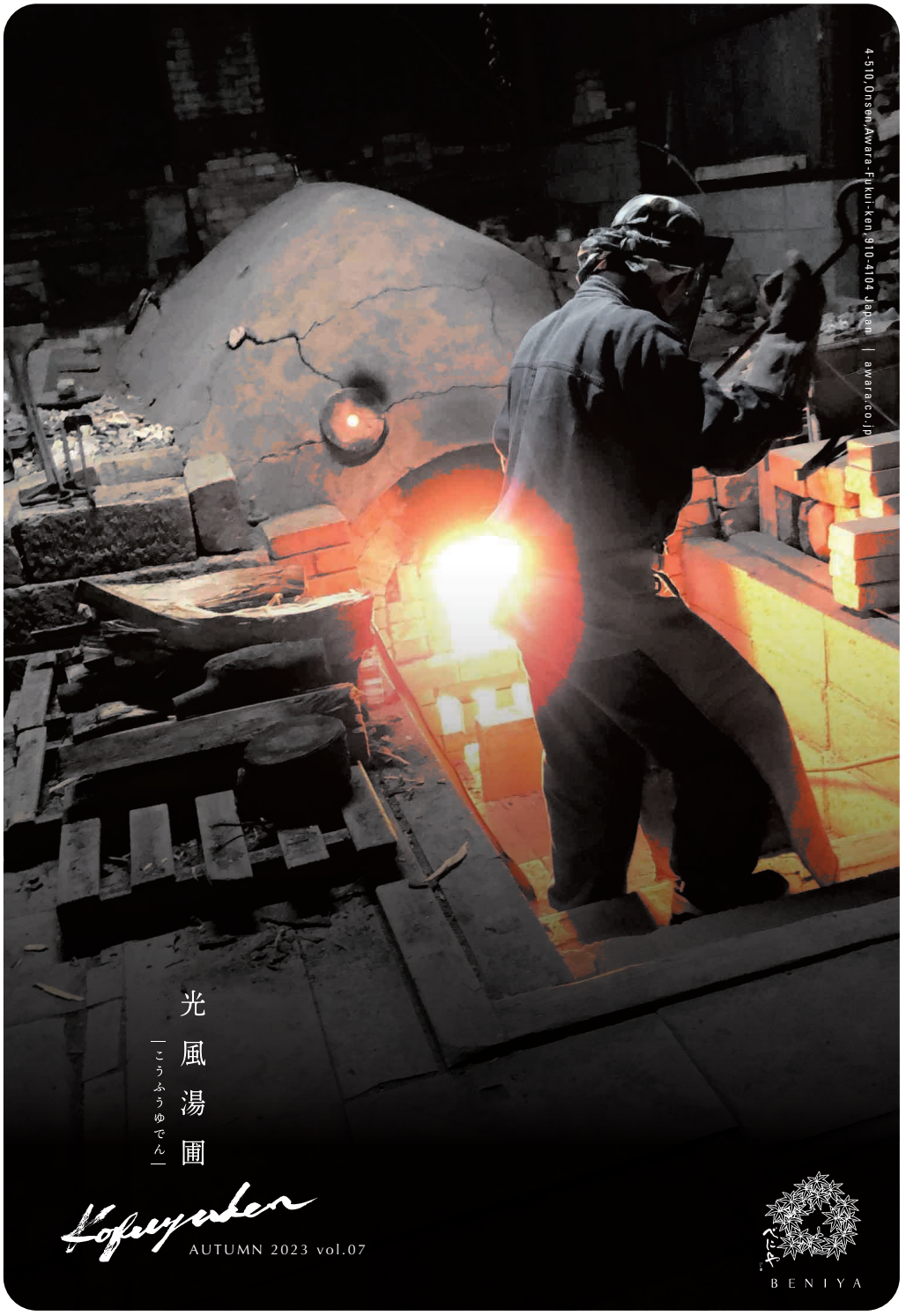
春に近づく時期だけの、水がにを堪能する期間限定プランです。
※2月21日〜3月31日限定

[編集後記] 前回の山本建具さんも今回の白越さんも、木材に囲まれながらの取材だったり、先輩の職人技を見て覚えるしかなかったという話があったりと、場面も状況も全く違うにもかかわらず、端々に共通した要素があって、本筋と違う面でも勝手に楽しんでいました。(土橋)

今回初めて、縫製工場を訪れ、洋服が完成されるまでの工程を見学させていただきました。洋服を作る為にここまで人の手が加わっているとは思わず、とても驚きました。普段身につけている衣料品にも、作る人の優しい気持ちが込められていると感じると、洋服を着ることがさらに楽しくなります!(狗川)

kōfu yuden 光風湯圃 べにや
910-4104 福井県あわら市温泉4-510
TEL 0776-77-2333／FAX 0776-78-7308
awara.co.jp

季刊誌 光風湯圃
2023年11月15日発刊



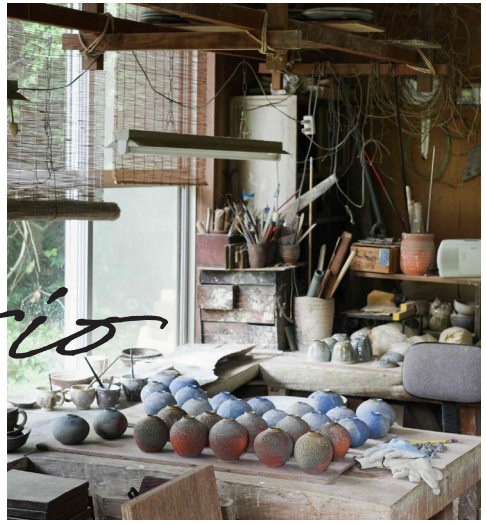
ロビーから玄関に出るとき、そっとお客様を
お見送りするように並んでいる売店の越前焼の器たち。
彼らもまた人の縁を繋いでくれる手づくりの品々なのです。

我流の我流が焼き上げる器と縁

Territorio

No.6 / ECHIZEN SHIOKOSHIGAMA

越前 塩越窯



あわら温泉街から北へ車を走らせること10分少々。波松という、小さな集落があります。同じ旧芦原町内ですが、やや荒々しい海を見下ろすように山あいに作られた高低差のある家並みは、また一風違うあわらの姿を感じることができます。近隣には以前サツマイモで紹介した北潟・富津地区や、関西でもコマーシャルでおなじみ芝政ワールドがあったりします。そんな波松から今回紹介するのは、福井の伝統的な焼物、越前焼をつくっている塩越窯（しおこしがま）の白越不朝（しらこしふちょう）さんです。

白越さんはこの波松に生まれ育ち、たまたま近所で越前焼をやっていた梅藤哲朗氏のところで窯で火を焚くための薪割りのアルバイトをしたことがきっかけで越前焼に興味をもち、やがて梅藤氏のもとで焼物について勉強し、1987年に独立。自分で窯もつくり、以後35年以上にわたって作品をつくり続けています。日本六古窯にも数えられる越前焼は上薬を使わず高温で焼いて土を締める『焼き締め』で頑丈にする特色で水がめや、すり鉢のような日用品として重宝されてきました。使用する土には鉄分が多く含まれ、黒みを帯びた茶褐色のものが多くみられます。白越さんが使用しているのは穴窯。山に掘った窪みの上に屋根を固めて造ったような形状をしています。この中に土で成形した器をたくさん並べ、火を焚いて焼くのです。焼くために丸4日夜通しで窯に火をおこすので、当然薪も大量に必要になります。ちょうど我々が取材に訪れた際にはあちこちに冬場に備えた薪の壁ができていました。

「窯に火を入れるのは年に冬と春先の2回だけ。その2回でこの山のような量を全部使う。夏場はほとんど薪づくりやね。薪だって買うと高いから自分で山へ入って折れてる木探したり、知り合いのところで『倒れた木とか、いらん木ないですか』って回ったり。山で木探してると、『この木どんなふうに燃えるんやろ』とか、とにかくいろんなこと考える時間ができる。よく『薪窯なんて効率悪いじゃないですか』なんて言われたりするんやけど、俺はその考えてる時間が好きなんや」1年のうち大半は準備期間にあてるという白越さん。でも、その時間こそが自分にとって大事な時間なのです。

「焼物っていうのは本当におもしろい。土を同じような形にこねて、窯の中の同じ位置に置いたとしても同じ物はできない。一回一回の湿気の具合だったり、風の通り方、灰のかかり方なんかでまるっきり変わってまう。窯の中に並べる時も焼き上がりをイメージして考えるんやけど、思うようにいかん。それが楽しい」白越さんが目指すのは、自分にしかつくれないもの。「梅藤先生自身も元々は彫刻をやっていた人で、そこから焼物に転向したから教え方を知らなくって。先生がやってるのを見て覚えるしかない。先生も我流だし、自分もそれを我流で習得してね。我流の我流でここまで来てしまった。でもそれが自分にとっては良かった。だってほかの人とは違う自分だけの形がつくれるから」やるなら中途半端ではなくこだわりを持って。越前焼だから、だけでなく白越さんの作品だから買ってもらえる。そういうものを目指しています。「焼物は焼いて完成ではない。使う人が、その器に合った使い方をしてくれてはじめて完成するんや。器も人も出逢いが大切なんや」

白越さんと焼物の周りにはいくつもの縁がありました。ある時おけら牧場の山崎さん（本誌第3号にて紹介。べにやに牛乳や卵を提供）に薪となる木をもらいに行ったところ、突然山崎さんの知り合いの女性を紹介されます。それが奥様との出逢いでした。また、火災前のべにやで売店に白越さんの品を置くようになり、白越さんが出入りをするようになった頃、姉崎花香先生（第2号にて紹介。館内のお花をいけてくださっている）と館内にてたまたま邂逅。そこで話すうちに姉崎先生の兄と白越さんの父が高校の同級生で、以降も関わりの深い間柄だったことが判明。白越さんは「いずれ自分の作品に姉崎先生に花をいけてもらって、展示会をしたい」と思うようになりました。そして、べにやが火災により全焼してしまったときでした。「もう一回立ち上がろうとしているべにやさんのために何かしたい。そうだ、今こそ姉崎先生と作品展をしてべにやさんを応援しようってなったんや」そうして二人展を開催。べにやの再建にも大きく協力してくださいました。

「いろんな人と出会って、縁が生まれるのは楽しい。俺が好きなのはデパート。個展やるにしても、画廊みたいな場所でやってると、興味のある人しかわざわざ入ってこないでしょ。その点デパートだと、買い物でたまたま通りがかった人でもふらっとやってきたりする。そんな人がふと作品を気に入ってくれて。そういう出会いも楽しめるのが好きなんや」現在も時折福井市内や東京で作陶展を開いている白越さん。白越さんも、作った越前焼も、また新たな出逢いをいつでも求めているのです。白越さんの作品はべにや売店のほか、えちぜん鉄道 あわら湯のまち駅前の『来也』さんにて販売。『来也』さんは常時営業しているわけではないため、お越しの際は一度白越さん又はべにやにご連絡くださいませ。

（土橋悠人）

越前 塩越窯

〒910-4277 福井県あわら市波松11-19-2
TEL 090-9761-6876
koshi@mx3.fctv.ne.jp @shio_koshi

来也 〒910-4104 福井県あわら市温泉1-201
（べにやより徒歩3分）

どこか懐かしい昔の学校のような建物の中に、
並んでいるのは100台を超すミシンや、完成した様々なかたちの洋服。
1枚の布が裁断機を抜けて、徐々に洋服へと姿を変えていきます。
そのひと針ずつに込められていたのは「花を贈るような優しい気持ち」でした。

お花を贈る様に、洋服を贈る ～株式会社モンスター～

今回ご紹介するのは、べにやのお部屋着やスタッフの法被を作ってくださっている越前市の老舗縫製工場、株式会社モンスターさんです。話をして下さったのは代表である草桶嘉之さんです。草桶さんは福井生まれ福井育ち、大学時代を東京で過ごし、卒業後はロンドンで約2年間留学生活を送ります。24歳の時に父親の体調が悪化し、急遽家業を継ぐため、福井に戻り、製造・営業などの様々な部署を経験し、35歳で社長に就任しました。「株式会社モンスターは、僕のおじいちゃんがつけた名前なんですが、はっきりした名前の由来はわからなくて」と笑う草桶さん。1949年、まだ物資が不足する日本で、草桶さんの祖父が1台のミシンで足袋を縫うところから株式会社モンスターの事業は始まりました。

創業当時は足袋や割烹着など、日常生活に必要な様々な衣料品を作るのが主でしたが、時代の流れ、そして会社の成長と共に、縫製する製品にも変化が現れます。大手企業の下着から、ドレスシャツ、ゴルフウェア、スキーウェアなど時代の流行と需要に応えた製品を作り縫製の技術を繋いできました。現在は主に全国のアパレルブランドや企業の依頼を受け、衣服や会社ユニフォームなど幅広い分野の衣料品を縫製しています。時代が変化するなかで海外での縫製も台頭し、今や日本で流通する衣料品で国内縫製されているのはわずか1.5%。コストの問題もあり、海外での製造が多くなる中、モンスターさんに縫製を依頼するブランドが国産にこだわる理由はやはり、“品質”に対する信頼です。

「衣服は機械だけでは作れないものであり、完成するためにはどこかに必ず人の手が加わっています」と語る草桶さん。工場を見学すると、真剣な眼差しで衣服と向き合う従業員の皆さんの姿がありました。モンスターさんは創業74年の老舗縫製工場。従業員30名の中には50年以上勤める従業員もいるとのこと。時代の変化に柔軟に対応していける力が必要なファッション業界で老舗ならではの長年培ってきた知識と技術が活かされます。幅広い衣料品を1つの工場で縫製することができるモンスターさんでは、従業員全員が一人一人得意な分野を持ち、最終的に一つの製品を作り出します。繊細な技術と細やかな気配り、衣服を作り上げる姿はまさに職人そのものでした。また、それぞれが違う役割を担っているからこそ、誰一人として欠けてはならない強いチームワークを感じます。

そんな、モンスターさんで4年前に立ち上がったのが自社ブランド“SAMUE”です。ブランド名の由来は、草桶さんの祖父がまだ小さい頃、お寺に出されて僧侶の道を歩んでおり、その時着ていた作務衣（サムエ）を、事業を始めた後もよく着ていたことから、創業した祖父に対する尊敬の意を込めて“SAMUE”の名前を付けたそうです。SAMUEでは主にワークウェアを縫製していますが、それは祖父が創業した当時もミシン1台でその時代の仕事に必要な割烹着などの衣料品を作っていたことが原点となっています。自社ブランド立ち上げ前は、外部のブランドに依頼された衣服を縫製し、納品していたため、その製品を購入したお客様の表情や声が作り手まで届かず、どこかもどかしさを感じていたそうです。しかしSAMUE設立後、お客様の声が直接届く様になり、これまで以上にお客様の気持ちをより近くで感じられ、寄り添った製品づくりが実現していると言います。また、従業員もより一層自信がつき、やりがいや仕事の価値が見出せるようになりました。

そのSAMUEの製品の一つが、べにやオリジナルのお部屋着です。肌触りのいい生地には和紙が入れ込まれています。和紙そのものに他の糸を織り合わせることで、和紙特有の柔らかい質感になります。また、和紙には吸水性や消臭、殺菌などの効果があり、温泉で温まった後の汗を吸収してくれるため、お風呂上がりも着心地よく、お寛ぎいただけます。男女問わず着られるシンプルなデザインと機能性を重視したお部屋着は、べにやでも大変好評です。実際にお客様から「着心地が良くてぐっすり眠れた」「リラックスできる」とのお声も頂いております。お部屋着は、お客様がべにやで過ごす時間を、より快適なものにするための大切な製品なのです。

取材後に草桶さんから企業パンフレットを手渡されました。従業員一人一人がお花を持ち、笑顔で映る写真が並んでいました。「お花を贈る様に、洋服を贈る」という意味が込められているそうです。「“お花を贈る”ことは受け取る人も、渡す人も嬉しいこと。洋服も同様に、洋服を受け取るお客様が喜ぶ姿を想像して大切にお届けするという思いがあります」とお話ししてくださいました。モンスターさんのお客様を思う気持ちこそが、お部屋着を通して、べにやでの心地よい空間を創り出していると感じました。

（狗川まりん）

株式会社 モンスター

福井県越前市堀川町4-36（旧武生市）
https://monster1949.co.jp

光風湯圃べにや

不易流行とは、変化しない本質的なものを、
大切にし、新しく変化するものを取り入れていくこと。

「不易流行」

女将 奥村智代

今年、越前蟹の解禁漁が43年来の大時化で船が出ないという事態が起きました。解禁の船が出ないなんて無いと思い込んでいたことに、我ながら恥ずかしく反省でございます。自然のなかで生かされていることを忘れていました。

5年前の火災で再建を決めた時の山中温泉「かよう亭」上口社長の言葉を今、改めて思い出します。「あなた方お二人は、温泉を神と思えますか?」の問いかけでした。その内には、日本の温泉宿の原点にもう一度返れるか?当たり前でない本物を見つめなおし感謝ができるか?の問いだったのでしょう。あの時、再建を決めたものの、これからの方向性や生き方を模索しながら、主人と二人で上口社長を訪ねたのでした。「温泉を神と思えるか・・・」は、忘れることのできない私の一生の課題となりました。

「温泉を神と思い 伝統文化を継承して日本の宿屋を残す覚悟があるなら 頂ける温泉の量から、部屋数を決めるのですよ。」「稼働率、宿泊単価、効率・・その算術ばかりでは、いつか行き詰ると思うよ。」90歳を迎える上口社長の目は優しく温かい。そして、言葉はストレートで、全くぶれずに分かりやすい。その頃の私の心の中・・・と言えば、2階建ての旅館を創れば2倍儲かる!3階建ての旅館にすれば3倍!そう考えていましたので、その思いが一気に崩れる瞬間でもありました。すべてを新しくできるなら「効率よく」、「儲かる」そして「新しい世代へ」そんな思いでございました。「不易流行」ですよ、と軽く微笑む上口社長。べにやが受け継ぐ歴史や大切なもの、変えないものと新しいもの。しかし最初に、私が思い描いたものは、新しいものばかりだったように思います。べにやの歴史や応援くださるお客様の思いをどれほど考えていたでしょうか、大きく反省をします。自然の中で生かされて、その恵みを頂きべにやの歴史が受け継がれてきた。再建の今、原点に戻り営みを見直すことを「温泉を神と思えるか・・」とおっしゃったのでしょう。

新べにやの設計を手掛けてくださった建築家の小堀哲夫氏もこの度発刊された「建築家のアタマのなか」で温泉旅館の魅力とは何か・・・目に見えない歴史とどう向き合う・・など、べにや再建の建築設計での思いを追求しながら「べにやの記憶を大切にしながら、未来につながる新しいべにや旅館をつくりたい」と書いてくれました。設計にあたり、べにやの過去を思い出すワークショップをスタッフとともに何度も繰り返したことも思い出します。そして再建から、二年が経ちました。以前からのスタッフと、火災前のべにやを知らないスタッフといろいろな形で交わり、べにやおもてなしが歴史を繋いでいるように思います。まだまだ「不易流行」の精神には、至ってないでしょうがお客様とのご縁を重ねるたびに、その答えを頂けるように感じております。

来年3月いよいよ北陸新幹線が福井・敦賀へ延伸となり、また新しい時代を迎えます。べにやを応援してくださるお客様、地域の方、べにやのおもてなし、先祖から受け継がれる温泉、大切なすべてを守り感謝して、さらなる新しい新幹線敦賀延伸の時代を迎え、「不易流行」の言葉に、真摯な気持ちで、もう一度べにやの営みを重ねて参りたいです。「新幹線が来ると予約が取れなくなるのでは?」時々そのようなお話になります。「お身体が空きましたらいつでもお電話ください、ぜひご用意申し上げます。でも、満室の時は、一緒にべにやおもてなしの方をお手伝いいただくのはいかがでしょうか～・・」楽しく冗談を交えながら、昔話と未来話に花を咲かせ笑顔がこぼれる日々の営みに感謝でございます。

改めまして「これまでも～これからも～」スタッフ一同益々精進してまいります。そして光風湯圃べにやを引き続き応援願いたく、ご来館心よりお待ちしております。

御礼まで
べにや女将 奥村智代